

じん で い せ き

陣出遺跡発掘調査 説明会資料

調査地：鎌倉市寺分字上陣出 393 番の 11 ほか / 開催日時：令和 7 年（2025）10 月 4 日（土）

調査面積：2,600 m²
調査期間：令和 7 年 6 月 12 日～
調査機関：株式会社イビソク

はじめに

「陣出遺跡（鎌倉市 No.351 遺跡）」は鎌倉市寺分^{てらぶん}の字陣出と上陣出に広がる遺跡です。『神奈川県遺跡地図』に奈良・平安時代、中世の遺物散布地のほか、社寺跡として周知されています。

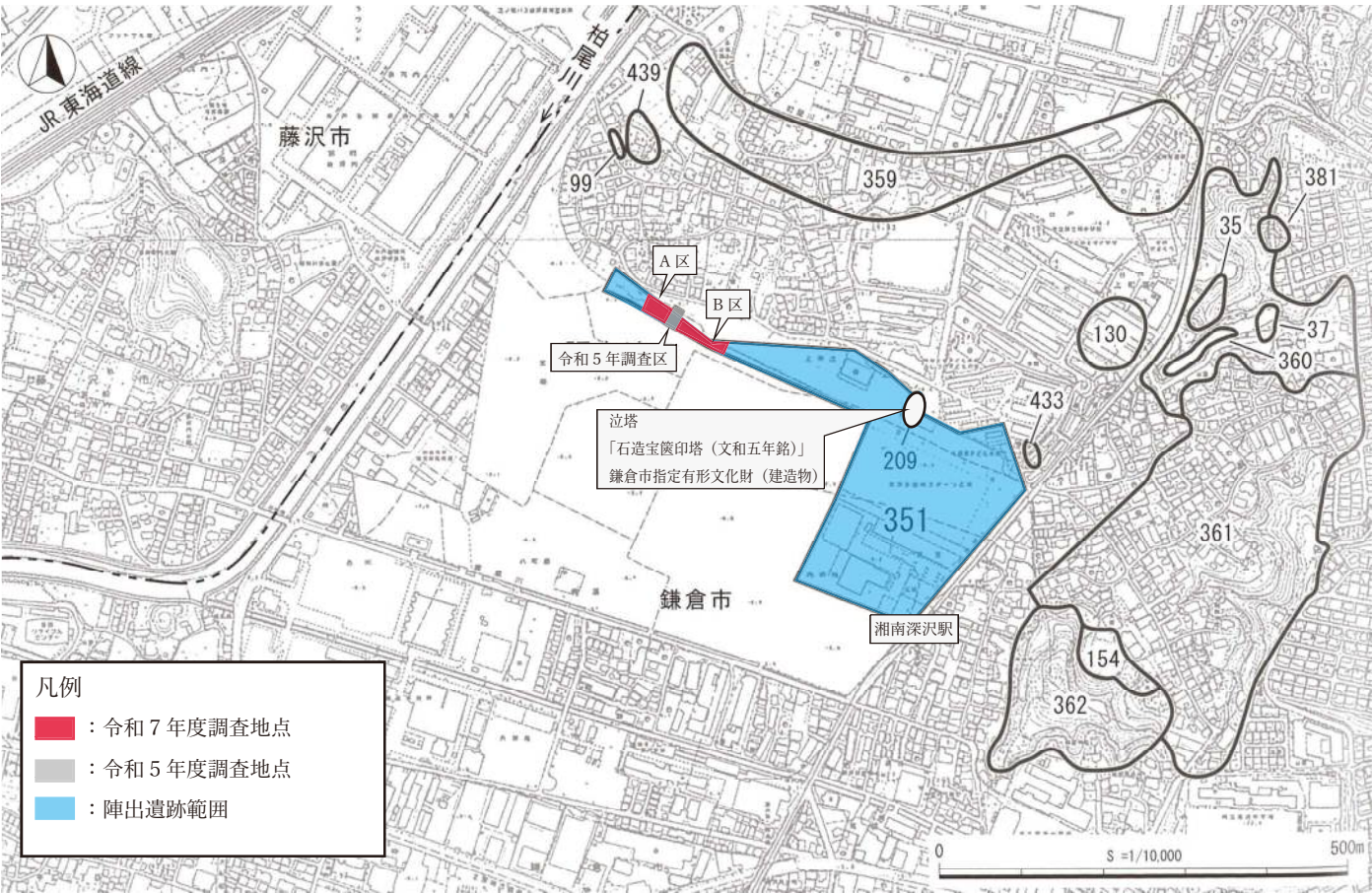
本遺跡が位置する陣出・上陣出はかつての寺分村に所在しています。寺分村は町屋村・山崎村・梶原村・常盤村周辺と併せて洲崎郷^{すさきごう}と呼ばれた地域です。「寺分」の地名は弘安年間（1278～1287）に創建された大慶寺^{だいけいじ}の寺領^{じりょう}を意味するもので、「大慶寺寺分」を略して「寺分」と称したことに由来します。洲崎郷は元弘 3 年（1333）の新田義貞軍と幕府方の北条（赤橋）守時の軍勢が激突した洲崎合戦が行われたと伝わる場所であることから、陣出の地名もこの合戦に関連するものと考えられます。江戸時代の貞享 2 年（1685）に書かれた『新編鎌倉志』に「寺分村」の地名が見られます。天保 12 年（1841）に書かれた『新編 相模国風土記稿』に石高は 257 石余、家数 26 軒と村の規模を伝えています。

周辺の歴史

「陣出遺跡（鎌倉市 No.351 遺跡）」の周辺には、「陣出やぐら群（市 No.130 遺跡）」や「藤塚西やぐら群（市 No.433 遺跡）」、「なき塔遺跡（市 No.209 遺跡）」のように丘陵斜面に造られた中世の墓所であるやぐらがありました。「陣出やぐら群（市 No.130 遺跡）」は、宅地造成のため現存しません。「藤塚西やぐら群（市 No.433 遺跡）」は令和 5 年（2023）に調査を行い、太平洋戦争中に防空施設として改変を受けていましたが、一部やぐらとしての痕跡を確認することができました。「なき塔遺跡（市 No.209 遺跡）」は、陣出遺跡範囲内の小高い丘陵の突端部に「泣塔」が建てられています。「泣塔」は文和五年（1356）銘の宝篋印塔^{ほうきょういんとう}で鎌倉市指定有形文化財（建造物）に指定されています。塔の背後にはやぐらが 1 基現存しています。昭和 17 年（1942）には、本遺跡が位置する深沢村字寺分と梶原にまたがる十二万坪の土地を削平し、横須賀海軍工廠造兵部の疎開工場用地（深沢分工場）が建設されました。深沢分工場では機雷や魚雷の製造が行われていたようです。戦後、深沢分工場は解体され、平成 18 年（2006）まで日本国有鉄道および JR 東日本大船工場として使用されていました。

過去調査

深沢地域の開発に先立ち、令和 4 年（2022）に試掘確認調査を実施し、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡が確認されたことから、開発予定地内の 420 m²を対象発掘調査を令和 5 年（2023）7 月から実施しました。調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡 4 軒とその他の遺構が発見され、土器片や石器などが出土しました。竪穴住居跡の 1 軒からは古代の装身具である石帯の丸軀^{まるとも}が出土しています。また、周辺からの流入と考えられますが、縄文時代早期（9,000～6,000 年前）の尖底土器^{せんていど}の底部片も出土しています。縄文土器や黒曜石の破片、弥生土器も出土しましたがこれらは、丘陵上にかつて存在していたと考えられる同時期の遺跡から流入した可能性があります。



調査地点周辺の遺跡



陣出遺跡空中写真（上が北）

今日の調査成果

本調査は令和7年（2025）6月からA区、B区の計2,600㎡を対象に調査を実施しています。A区では、奈良時代の竪穴住居跡1軒（SI-4）、時期性格不明の溝状遺構1条が確認されました。

B区では、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒（SI-10）、同時代の土坑1基（SK-9）などが確認されました。また、明確な遺構は確認されませんでした。弥生時代中期後半の土器（宮ノ台式）が一地点からまともって出土しています。

・SI-4（竪穴住居跡）

規模は東西310cm×南北423cm、深さ40cmを測ります。令和5年（2024）調査で住居東半部の調査を実施し、今年度はそれに続く西半部の調査を実施しました。過去調査では、カマドの位置を北として想定していました。調査の結果、住居の西端にカマドが造られていることが判明しました。カマドの煙道には、土師器甕が据えられた状態で出土しました。8世紀の土器が出土していることから、奈良時代の遺構であることが解ります。

・SI-10（竪穴住居跡）

規模は残存地で東西330cm×南北280cm、深さ10cmを測ります。住居の南側と西側は後世に削平を受けて消失しています。調査の結果、住居の東端にカマドが造られていることが判明しました。土器の時期から奈良・平安時代の遺構であることが解ります。



竪穴住居跡 SI-4（東から）



竪穴住居跡 SI-10（西から）



竪穴住居跡 SI-4 カマド（東から）



竪穴住居跡 SI-10 カマド（北から）



竪穴住居跡復元



カマド復元

・SK-9（土坑）

規模は東西166cm×南北156cm、深さ40cmを測ります。SI-10よりも下層の土丹層を切るように掘られることから、SI-10よりも古い時期に造られた遺構であると考えられます。遺物が出土していないため明確な時期や用途については不明です。

・遺物集中部

調査区西半から弥生時代中期後半の土器（宮ノ台式）が集中して出土しました。当初、竪穴住居跡を想定して調査を進めていましたが、明確に住居としての痕跡を確認することができませんでした。土器集中部より少し南に離れた包含層から石製品（装身具）が出土しています。



土器集中部（北から）



装身具出土状況（西から）



装身具（表面）



装身具（裏面）

土地利用について

本遺跡の地形は北から南に向かい緩やかに下っています。遺跡北側は近代の造成により岩盤が露出しています。調査によって発見された竪穴住居跡は、岩盤と沖積地の境に造られています。遺跡の南側は長い年月をかけて岩盤の傾斜を埋めるように遺跡西側の河川から流入した土砂や石が堆積しています。また、平安時代初頭まで湿地だったと推測され腐食した植物や石が厚く堆積しています。湿地のままでは人が住めないため、その後、土丹^{どたん}を入れ地盤を改良し、整地した痕跡も確認されています。

用語

沖積地：河川の流れによって運ばれた土や石が堆積し形成された土地。

土丹層：土丹とは柔らかい泥岩。土地の整地時に砕いた土丹を土と混ぜて地盤を硬くしていました。本調査においても部分的に土丹を入れて整地を行っていた痕跡が認められます。

包含層：考古学において遺物を含まれている土層のことを指します。